自慢の相互行為的機能に関する一考察

―褒めに対する応答に用いられる自慢に着目して―

西阪　亮（関西学院大学大学院生）

1. はじめに

本発表では，自慢が人々の相互行為においてどのような役割を果たすのかを考察する．従来，自慢は社会通念として避けられるべきものとされてきた（Pomerantz 1978，Leech 1983）．Pomerantz（1978）は自慢回避の制約（Self-praise avoidance）の存在を指摘し，話し手が自慢を行った際に，聞き手がそれを指摘して，制約の遵守を強制したり，あるいは，話し手自身が自慢を回避するようにふるまったりするシステムがあるとしている．また，Leech（1983）は丁寧さの原理（Politeness Principle）を提示し，その中の謙遜の公理では，「自身への称賛を最小に／自身への非難を最大に」ということが提唱されている．この公理を自慢に適用すると，自慢を控えるべきものとして扱っていると言える．他方，人々はこのような制約に志向しつつも，自慢を行うことがある．その際，人々は様々なやり方を利用して，自慢に聞こえないようにふるまうことが指摘されている（戸江 2008，Speer 2012，Wu 2011，Wu 2012）．また，褒めに対して同意／受諾を行うことは，自身への褒め，つまり，自慢となりうることも指摘されており（Pomerantz 1978），それを回避するために人々が用いている手段が明らかにされている（Pomerantz 1978，張 2014）．このように，自慢を回避することは人々の社会一般的な規範として存在している．しかしながら，そのような志向がある中で，あえて自慢に聞こえうることを行うのは一体なぜなのだろうか．その時，人々は自慢を行うことで一体何をしようとしているのだろうか．これまでの研究では，自慢がどのように回避されるかということが分析の主な焦点であり，自慢そのものが達成する相互行為的な役割については十分に検討されていない．そこで本発表では，褒めに対する応答位置で見られる自慢に着目し，会話分析の手法を用いて分析を行う．そして，自慢が褒めの応答位置でなされることによって，褒めの受け手が直面している相互行為上の課題を解決する手段になっていることを主張する．

2. データと分析

本発表では，発表者が 2019 年 8 月に収録した約 2 時間の居酒屋での会話データを用いる[1]．会話参加者は 2 人の男性 G と R と，女性 S の 3 人である．G と R は大学時代の同級生で，S は G と R よりも 3 つほど年下であるが，彼らは同じサークルに所属していたこともあり，親しい関係である．本発表で扱う自慢は，S または R が行った G への褒めの応答位置でなされ，①褒めをさらに要求する形で行われる自慢，②褒めを受け入れた後，これ以上必要ないと述べる形で行われる自慢が見られた．

2.1 事例の分析

まず，事例①を見てみよう．33 行目の G の「むこう:(.)彼氏と別れて(おれに来た)らしい.」という発話は，この断片の前に話していた,「G の彼女が結婚前提で G と付き合っている」という G の考えを支持するものとなっている．つまり，G の前に付き合っていた彼氏と別れてくるほど，彼女は自分に対して本気であるという旨の発話であると考えられる．他方，R は，33 行目の G の発話を聞いた後，36 行目で「別れてまで:¿」と「まで」という程度を表す副詞を用いて聞き返す．また，S も 35 行目で，「なんて」[2]と，言葉を聞き返す発話を 1 回だけでなく，2 回 3 回と繰り返す．これらから，S と R にとって 33 行目の G の発話が，聞き返してもう一度確認するほど大きなニュースであったことが窺える．さらに，S が 38 行目「若干かぶってるってこと¿」や，40 行目「すきになってんのは.」と問い詰めている様子から，S が G の話に強い興味を示しているように見える．その S の問い詰めに対し，G は，38 行目に対しては首を振って否定する一方で，40 行目に対しては「>あそれは<かぶってる,」（42 行目）と肯定する．このことから，付き合っているのは前の彼氏と重なっていないが，恋愛対象として好きになっているのは重なっているということを認めていることがわかる．それが明らか

[1] 本発表は，発表者が第 45 回社会言語科学会研究大会で発表した内容を基に，同データを用いて別の視点から分析・考察を行ったものである．

[2] 「なんて言ったの」という相手が今言ったことを聞き返す発話の省略形に聞こえる．

になった後，43 行目でＳはＲに視線を向け，肩を叩き，44 行目で「(聞き)ました.」と発話する．この時，Ｒも先ほどのＧの発話を聞いていたことは明らかであり，わざわざ確認を取る必要はないだろう．それにもかかわらず，Ｒに確認要求を行う様子から，Ｇとのやりとりから、ＳとＲのやりとりへと参加の枠組みを変更し、この驚くべき話題をＲと共有することに志向しているように見える．他方，Ｒもそれに志向しているように見える．44 行目に対し，Ｒは 46 行目で「なんで::?(1.5)なんで:?」と理由を尋ねるように驚きを示し，それを当事者であるＧではなくＳに向けることで，自身が感じた驚きをＳに共有しようとしている．続く 47 行目で，Ｓはその Ｒの質問に答える形で「そんだけＧさんが魅力的ってことや.」と発話し，48 行目でＲはそれに対して「やばい」という言葉で評価し，同時にＳの 47 行目に同意する．このことから，44 行目から 48 行目までのやりとりは，Ｇを除いたＳとＲの２人でなされている．したがって，ＳとＲは２人でこの驚くべき話題を共有し，評価していると言えるだろう．しかし，この２人のやりとりにＧは入っていないものの，Ｇは確かに聞き手として存在している．そしてこのやりとりは，Ｇの話題から始まっていること，47 行目のＳの「魅力的である」というポジティブな評価の対象がＧであること，Ｒの「やばい」も，Ｇを対象とした評価であることを踏まえると，Ｇの存在に焦点を当てた内容であると言える．つまり，これまでのやりとりにおいて，Ｇは直接関与していないものの間接的な「褒め」を受けていると考えられる．その後，49 行目でＧは「もっとゆって.」と発話する．この「もっとゆって.」という発話は，自身への賞賛がそれだけではまだ足りないものであることを主張している点で自慢に聞きうる．また，さらなる要求を行うということは，自身に向けられた褒めを受諾しているとも言えよう．このことも，49 行目が自慢に聞きうる根拠となりうる（Pomerantz 1978）．続く 50 行目でＳは笑いながら，「はらたつ」と，怒りを表す表現を用いてＧを非難する．この非難は，自慢に聞きうる発話の後の位置で産出されており，第１節で見た自慢回避の制約に志向した聞き手の反応に則したものであると言えるだろう（Pomerantz 1978）．

次に，事例②を見よう．01 行目から 08 行目でＧは店員と注文のやりとりをしており，ＳとＲはその様子を見ている．01 行目でＧが「豚の角煮」を注文した直後，Ｓは 03 行目で「>ぜんぶ<(Ｓの名前)が食べたいやつ:.」とＲに顔を向けながら発話し，Ｒもそれにうなずいて応答する．そして次に 04 行目でＧが「エイひれ炙り焼き」を頼んだ直後にはＲは目を見開いて驚いた様子を表し，Ｓは 06 行目で「こうゆうところが(　)やで,」と言いながらＲを見つつＧを指さし，そして拍手をしている．このことから，店員を呼ぶ前に，Ｓがメニューを見ながら挙げた候補を，Ｇは店員を呼んで注文する際にその候補をすべて注文したということがわかる．そしてそのようなＧの行動に対して，ＳはＧをポジティブに評価するような発話をしていると考えられる．07 行目から 10 行目の間で店員とのやりとりが終了したことが明らかになった直後に，Ｒは 11 行目で「モテるな.」とＳの方を見ながら発話する．そして，ＳはＲの方を向き，「モテるとこやわ.」と同意する．このＳとＲのやりとりは，この２人だけで行われているように見え，Ｇはその２人のやりとりを聞いている状態であると言えよう．しかしながら，この「モテる」という異性から好かれることを意味す

【事例①】

((断片の前に、Ｒは、ＧとＧの彼女が付き合いたてであり、まだ別れる可能性もあるとＧをからかっている。Ｇはその Ｒのからかいに対して、Ｇの彼女は自分と結婚前提で付き合っているらしいということを述べている。断片はその後のやりとりである。))

```
33 G：むこう:(.)彼氏と別れて(おれに来た)らしい.
34     (0.8)
35 S：>なんてなんて゛なんて゛,<
36 R：別れてまで:¿
37    (2.6)
38 S：若干かぶってるってこと¿
39    (1.7)
40 S：すきになってんのは.
41    (1.0)
42 G：>あそれは<かぶってる,
43     ( 0 . 7 ) * ( 1 . 0 ) ** ( 1 . 2 )   **
   s：            *見→R------------------------->
   s：                              **Ｒの肩を叩く-->**
44 S：(聞き)ました.
45    +(0.5)
   s：-------->
   r：+見→S--->
46 R：なんで::?(1.5)なんで:?=
47 S：=そんだけＧさんが魅力的ってことや.=
48 R：=やばいな@   :@@   . @
   g：          @うなずく->@手で自分を仰ぐ-->
   g：               @@顔がにやける-------->
49 G：もっと@ゆって.
   g：---->@
   g：-------------->
50 S：*e h h** e ¥ は ら **た つ :[: : ¥]*ehahah**a
   s：*後ろに引きながらＲを見る---------->*
   s：        **指差し→G-->**口を押える---------->**
   g：------------------------------------------->
51 R：                                  [ehehe]
52 G：まあ@@なんか:６月**ぐらいから気になりだしたらしい.
```

【事例②】

((この断片の前では、Ｓがメニューを見ながら食べたいものの候補をいくつか挙げている。その後Ｇへとメニューを渡し、Ｇもメニューを見た後、店員を呼び、注文をしている。断片はその途中から始まる。))

```
01   G：で豚の角煮[:.
02   T：          [豚の角煮::はい,
03   S：*>ぜんぶ<(Ｓの名前)が食べた+いや*つ:   +.
     s：*顔をＲに-------------------->*
     r：                          +うなずき-->+
04   G：*エイひれ炙り焼き*で,
     s：*顔Ｒ--------->*横目でＧ->>
05   T：エイ+ひれ*炙り焼[き:.
     s：------->*顔Ｒ------->
     r：    +目を見開く----->
06   S：                [こうゆうと こ ろ *が[(      )+やで,*
     s：                ->顔Ｒ、Ｇ指差し->*拍手をし顔を戻す->*
     r：                ------------------------->+
07   T：                                        [以上でよろし
08     [いですか?]
09   R：[はい.    ]
10   T：ありがとうございま:す,
11   R：モテ+ る な +.
     r：    +顔Ｓ-->+
12   S：* モ テ る と こ や わ *.
     s：*グラスを置いて、顔Ｒ------->*飲み物を飲む-->
13   G：((にやけながらうなずく*))
     s：----------------->*
14   S：*ha [ha ha * ったっつ : : *.ha:]
     s：*Ｇを指差す->*手で口を隠す->*
15   R：     [ モ テ ポ イ ン ト 追 加 : .]=
16   S：=>なんで<@ちょっとどや顔@す(h)*る(h)[ん(h).]
     g：          @うなずく---->@
     s：                              *グラスを口に-->
17   R：                                    [nhuhuhuhu]
```

る言葉は，ポジティブな評価であると考えられ，その評価の対象は，先ほどの注文のやりとりから考えるにGである．つまり，この事例においても，SとRは2人のやりとりによってGを間接的に褒めていると言える．それに対し，Gは13行目でうなずき，褒めを受け入れる．したがって，ここでもGは自慢に見える反応を行っていると言えるだろう．そして，そのようなGに対してSは，14行目でGを指さし，「hahaha ったっつ::.ha:」と，おそらく「腹立つ」であると思われる発話で非難する．さらに，16行目では「>なんで<ちょっとどや顔するん.」とGのうなずくという行為を「どや顔」[3]と形容し，理由を尋ねる質問の形でその反応自体のおかしさを非難している．しかし，Gはそれだけで終わらず，18行目で「までもおれもうモテんでいいから.」を産出する．この「もうモテんでいいから」という発話は，自身への褒めを受け入れた上で，それがすでに自身にとって必要のないものとして扱っている点で自慢に聞きうるものであり，先ほどのうなずくという動作よりも強く自慢として生起しているように見える．それに対し，Rは目を見開き，20行目で「#ha::::#」と掠れた声を出すことで怒りを表すような態度を見せ，Sはグラスを音を立てて置き，怒ったような表情でRの方を向き，21行目で「聞いた.」と問いかける．そして23行目で「今のはケンカ売ってるやんね？」と明らかにGの18行目の言葉を取り上げ，非難を向ける．これもまさに，自慢の制約に志向した聞き手の反応として記述可能であるだろう．

```
18  G：までも@おれもうモテんでいい@から.
    g：      @顔左-------------->@顔SR、にやつき-->
    s：---------------------------->
19    (0.5)@ +(0.4)
    g：--->@
    s：----------------->
    r：       +目を見開く->
20  R：# . *h a @+ : :* : :#
    r：---------->+顔S------>
    s：--->*          *グラスを音を立てて置く-->*顔R-->
    g：          @飲み物を飲む------------------------->
21  S：聞い@た.
    r：------->
    s：------->
    g：-->@にやけながらSR->
22  R：.khi::::今のは:˚ あの:˚ =
23  S：=今のはケンカ売って[るやんね?]
    ((Rはカメラを指差し、「今撮ってるから」という発話を行う。
    それによってSとGが笑い出す。))
```

以上見てきたように，2つの事例は褒めに対し，自慢に聞きうる応答を行い，それが非難されるという大きな括りとして共通の連鎖構造を持っている．そして，自慢に対して非難が共通して行われているように，人々は自慢を避けるべき行為として志向していることが2つの事例からも読み取れる．しかしながら，なぜGは，社会的規範において逸脱的な自慢という行為を，自らはその規範に遵守するようなふるまいをせず，今ここの相互行為の中で行うのだろうか．次節では，Gが今そこの相互行為において直面している課題を特定し，自慢を行うに至った理由を明らかにする．それにより，褒めに対する応答における自慢がどのような相互行為的機能を果たしているのかを考察したい．

2.2 自慢が果たす相互行為的機能

上掲した2つの事例において最も特徴的なのは，Gに向けられた褒めが，“SとRの2人のやりとり内で”行われており，“間接的である”ことである．つまり，褒めの対象はGであるものの，それが直接的にGに向けられているわけではないため，順番交替の観点から見たとき，Gは次の話者として選ばれ，褒めに応答する機会を割り当てられているわけではない．したがって，Gは褒めの次の位置において，“答えなくてもいい”状況にあると言える．そのような位置であるにも関わらず，Gはあえて自慢に聞きうる発話を行う．それは一体どうしてなのだろうか．

ここで，Gが直面している相互行為上の課題について考えてみよう．Gは2つの課題に直面していると思われる．第一に，Gはこの三者間の会話において，一時的にやりとりの外にいると言えるだろう．それは上述の通り，Gに対する褒めがSとRの2人だけのやりとりによって行われていることから見て取れる．Gが三者の会話に戻ることは，相互行為における一つの課題であると言える．第二に，GはSとRによるからかいに対処するという課題に直面していると思われる．SとRのGを褒めるやり方に再度注目しよう．彼らが褒めるやりとりを開始するのは，事例①では，Gの今の恋人が元恋人と付き合っている期間にお互いが好きになっていたという極めてニュース性の高いことを聞いた直後であり，事例②では，Sが食べたいものをすべて注文するという極めて配慮に富んだ行動を見た直後である．そしてそのような位置において，事例①ではSがRに「(聞き)ました.」(44行目）と話しかけることによって，事例②では，SがRに「>ぜんぶ<(Sの名前)が食べたいやつ:.」(03行目）と話しかけることによって，SとRは2人だけのやりとりを開始する．さらに，それはこそこそと，しかし，Gにも見聞きできる形で，いわば，ヒソヒソ話のようなやり方で行われている．この様子は，会話の正式な参加者であるGを蚊帳の外に置き，それにもかかわらず，Gを称賛するようなやりとりを，Gに見せるような形で行っている点で，Gをからかっているようにも見える．さらに，事例②の15行目「モテポイント追加:.」のように，ポイント制のゲームのような褒めの仕方も，このやりとりがからかいの要素を含んだものに見える所以となっていると考えられる．また，Drew (1987) は，からかいが生じる環境について，からかいを受ける話し手が何かについて過剰に行った後の位置で起こると述べている．上述の通り，Gによる恋人と付き合った経緯に関する裏話（事例①）や，注文時に見せた配慮（事例②）は，それを目の当たりにしたSとRにとって，彼らが驚きを示したり，賞賛したりしているように，

[3] 「どや顔」とは，「自らの功を誇り「どうだ」と自慢している顔のこと」を言う（大辞泉）．

目を見張るものとして捉えられている．つまり，今ここの環境が，からかいが可能な位置であることも，ＳとＲによるＧを褒めるやりとりがからかいとして記述できる根拠となりうる．

以上のことから，Ｇは三者間会話の外部にいる状況の回避，および，ＳとＲによるからかいへの対処という２つの相互行為上の課題に直面している．Ｇによる自慢に聞きうる応答は，それらを解決する手段として用いられていると言えるだろう．初鹿野・岩田（2008）は，三者間の会話において，その場にいる参加者について他の２人の参加者が褒めるやりとりを行うとき，話者として選ばれていないが褒められている者が順番をとって発話する事例を挙げている．その時，選ばれていない参加者は自らに対する褒めを利用し，やりとりの外に置かれている状況を回避しているという．本事例においても，Ｇは自身への褒めを利用し，自慢を行うことでやりとりへの参与を獲得していると考えられる．実際，事例①で，Ｇは自慢によって非難を受けており，それで得られた発話権を利用することによって、52 行目からは，元の話題へと戻ることを可能にしている．また，事例②においては，うなずき（13 行目）によって，Ｓの反応を引き出し，さらに 16 行目のような質問の形を受けることで発話権を獲得している．このように，Ｇによる自慢は，やりとりの外に置かれている状況を打破する手段として用いられていると考えられる．他方，Ｇは自慢をすることによって，自らに向けられたからかいというやりとりの方向性を変えることを可能にしている．それは，ＳとＲによる２人で行われていたＧに対するからかいが，Ｇに対する非難へと行為が変化していること，また，事例①においては，52 行目から元々行っていた恋人との馴れ初めに関する話に戻っている点でこのからかいのやりとりが収束していること，さらに，事例②においては，18 行目でＧがすでに「モテること」を必要としていないという主張を行っている点で，Ｇが「モテる」という話題の転換に志向していることから見て取れる．まとめると，Ｇは自慢を行うことによって，自身への非難を引き出し，三者間のやりとりへと復帰すると同時に，現行のやりとりの方向性を変え，自らに対するからかいが続くことから脱出していると言える．このことを踏まえると，Ｇはあえて自慢に纏わる制約を利用し，聞き手による相応の反応を引き出すことによって，今この場のやりとりにおいて直面している課題に対処していると考えられる．

3. おわりに

以上，本発表では，自慢に聞きうる発話に焦点を当てて分析を行い，その相互行為上の機能について考察した．まず，自慢者はやりとりの外部に置かれている状況を回避すること，自らに向けられたからかいに対処することに志向していた．その解決手段としてあえて自慢を行い，会話への参与を獲得すると同時に，やりとりの方向性を転換させ，自身に向けられたからかいの連鎖を収束させることを可能にしていた．本発表で得られた知見は，これまでの自慢研究に対し，自慢の相互行為的な利用可能性を提示することにつながると考える．しかしながら，今回は褒めの応答位置における自慢に限定して分析を行っており，すべての自慢が上述した相互行為の機能を果たすとは限らない．そのため，連鎖の第一位置で起こる自慢の事例などに焦点を当て，分析を行う必要があるだろう．それについては今後の課題としたい．

参考文献

張承姫（2014）．相互行為としてのほめとほめの応答－聞き手の焦点ずらしの応答に注目して－ 社会言語科学，17(1)，98-113.

Drew, Paul (1987). Po-faced receipts of teases. *Linguistics*, 25, 219-253.

初鹿野阿れ・岩田夏穂（2008）．選ばれていない参加者が発話するとき－もう一人の参加者について言及すること－ 社会言語科学，10(2)，121-134.

Leech, Geoffrey. N. (1983). *Principles of Pragmatics*. London and New York: Longman.

Pomerantz, Anita (1978). Compliment Responses: Notes on the co-operation of multipleconstraints. In Schenkein, Jim (Ed.), *Studies in the organization of conversational interaction*. pp. 79-112. New York: Academic Press.

戸江哲理（2008）．糸口質問連鎖 社会言語科学，10(2)，135-145.

Speer, Susan A. (2012). The Interactional Organization of Self-praise: Epistemics, Preference Organization, and Implications for Identity Research. *Social Psychology Quarterly*, 75(1), 52-79.

小学館大辞泉編集部編（2012）．大辞泉 第二版 小学館

Wu, Ruey-Jiuan R. (2011). A conversation analysis of self-praising in everyday Mandarin interaction. *Journal of Pragmatics*. 43, 3152-3176.

Wu, Ruey-Jiuan R. (2012). Self-Praising Through Reporting: Strategic Use of Two Reporting Practices in Mandarin Conversation. *Discourse Processes*. 49(8), 622-659.